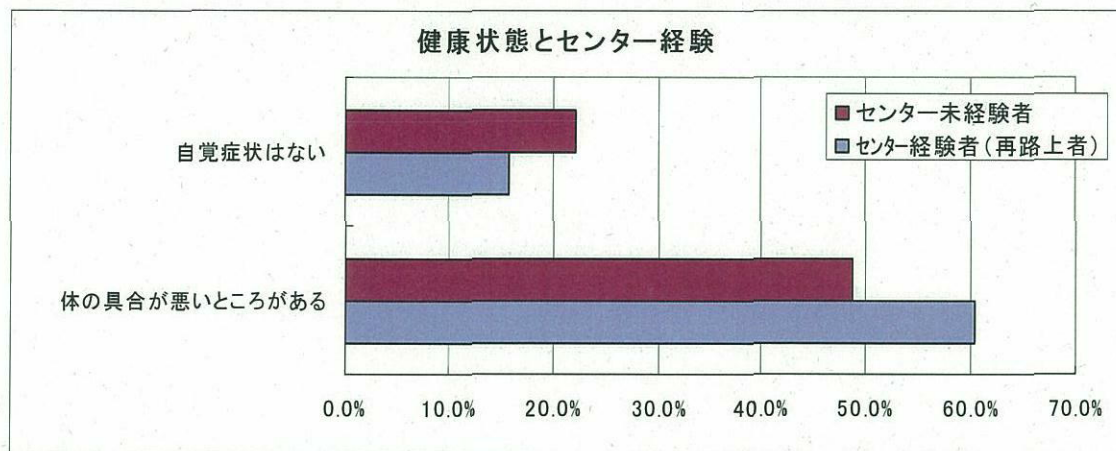


これをみると、センター経験者の方が年齢が若いにもかかわらず（表1）、殆どの項目で経験者のほうが困難を訴えている人が多い（ χ^2 乗検定で、「いざこざ」以外はすべて1%有意）。特に、著しく低いのが「寝場所」と「雨や寒さ」であり、センターに入所することは、成功すれば路上生活からの脱却も可能であるが、失敗すれば、一から路上生活を始めることとなるため、生活水準が低くなることが示唆される。同様の結果は、健康状態からも得られた。しかし、反対に、困難をもともと訴える人だからこそセンターにはいったということも考えられるため、因果関係の方向性ははっきりとはわからない。



この傾向をさらにはっきりとみるために簡単な回帰分析を行った結果が以下である。サンプルは男性に限った1,924サンプルである。これをみると、ほかの要因をコントロールした上で、年齢階層の影響をみると「食べ物」に困窮する確率が65歳以上で上がるものの、そのほかには年齢層のみによる影響はみられない。この理由の一つは、通算の路上生活期間と、今回の路上生活期間が年齢の影響を吸収してしまっている可能性が考えられる。路上生活期間（通算）は、「孤独」と「その他」の困窮に若干の影響があるものの、殆どの係数は有意ではない。むしろ、影響がみられるのは、「今回の路上生活期間」であり、多くの困窮項目（「寝場所」「雨・寒さ」「いざこざ」「孤独」で有意）においては、最初は路上生活期間が長くなるにつれ困窮の確率が減っていくが、ある程度以上の長さになると逆に増えていくというU字型の構造がみられる。収入は、収入がない人に比べ、ある人は「食べ物」「寝場所」「雨・寒さ」「入浴・洗濯」の困窮を訴える確率が低い（「その他」については、逆）。

興味深いのは、「自立支援センター経験有り」の係数である。これは、収入、路上生活期間、年齢などをコントロールした上でさえも、「食べ物」「寝場所」「雨・寒さ」「入浴・洗濯」の困窮項目で、正で有意である。つまり、同じ年齢、同じ路上生活期間、同じ収入の人であっても、自立支援センター経験がある人のほうが、ない人よりも、困窮の確率が高くなっているのである。また、「体の具合の悪いところがあり」と訴える確率も高くなっている。これは、上記のクロス分析の結果を補強する結果である。